落ち着きのない児童の、WISC-Ⅳ知能検査による分析
～学校で有効な具体的支援の検討～

松田昭憲

Analysis of restless children using the WISC-IV intelligence test.
～Consideration of specific supports that are effective in schools～

Akinori MATSUDA

Ⅰ　研究目的と意義

WISC-Ⅳ知能検査は、教育現場において、様々な「困り感」を抱えている児童・生徒への実態把握に活用されている。その理由として、この検査が認知能力を細かく分けて評価することが可能で、児童・生徒の「得て不得手」や「力の偏り」が分析できるからである。

しかし、学校現場で、この検査結果から提案された支援を、有効な具体的支援としてそのまま取り入れることの困難さが見られる。その理由として、検査結果から得られた分析が複雑で、具体的な支援に結びつきにくいこと、また、具体的支援策が個別の支援となり、一斉指導での支援とはやや異なる面があり、分析による児童・生徒の得手不得手は理解ができても、一斉指導が中心である学校においては活用できる具体的支援につながらず、結果的に学校での児童・生徒の「困り感」への効果的な支援となることが困難となっていることが考えられる。

そこで、本研究では、検査結果の分析のみではなく、担任や対象者等との面談から得た情報を取り入れ、「困り感」の原因について分析し、「学校で使える」学校で実行可能な、そして有効な具体的支援を検討したい。更に、実施される支援の経過をフィードバックしながら、より効果的な支援策を再検討し提案することで、対象児の「困り感」の軽減・解消を図りたい。

Ⅱ　研究方法

１．WISC-Ⅳ知能検査を用いた調査

各学校に研究依頼を行い、各学校からの検査依頼の提出を受けて WISC-Ⅳ知能検査を実施する。また、“日常の気づきから支援につながる「子どもと教師のためのアセスメントシート」”により、児童の実態を確認する。検査後は担任等の面談で得た情報も活用しながら検査結果を分析し、学校現場で活用できる具体的支援策を担任及び特別支援教育コーディネーターに提案する。

２．倫理的配慮

保護者及び児童の在席する学校長に、研究趣旨と研究参加による不利益のないことを“「WISC-Ⅳ知能検査による、配慮や支援を必要とする児童・生徒の具体的支援の検討」研究の説明文書”にて説明し、“「WISC-Ⅳ知能検査による、配慮や支援を必要とする児童・生徒の具体的支援の検討」研究の同意書”の提出により同意が得られたものとした。そのデータは筆者が厳重に保管し、記述した内容から個人が特定できないよう連結不可能匿名化とした。また、本研究は宮崎学園短

期大学研究倫理審査会の承認を受けている（承認番号 2021008）。

３．主訴

学力は同年齢と同様の力であるが、多動性、衝動性があり、落ち着いて学習に取り組むことが困難である。また、「黒板が見えない」など、見えにくさを訴えることがあり、視知覚に問題があるのか、または何らかの特性からくるものかを知り、支援の方法を協議したいということである。

４．児童の実態

児童の実態を把握するため、A 教育委員会が提案している、“日常の気づきから支援につながる「子どもと教師のためのアセスメントシート」”を活用した。このアセスメントシートは、学校や家庭での様子など総合的に整理したシート、学習面に関する項目、行動面に関する項目（その１）、行動面に関する項目（その２）の４つに分かれている。学級担任と特別支援教育コーディネーターが検討し記入した。今回は、アセスメントシートの〈アセスメントシート②〉Table 1〈アセスメントシート②〉から、多動性、衝動性の傾向を見ることにした。まず、アセスメントシート「行動に関する項目（その１）」で、設問群「不注意」合計 3 ポイント、「多動性－衝動性」合計 7 ポイントである。このアセスメントは合計 6 ポイント以上で「著しい」と判断されるので、不注意傾向は強くないが、多動性・衝動性が著しく高いと考えられる。

視覚については、眼科を定期受診しており、視力は正常で目の病気や障がいはないと診断されている。そのため、眼科医は児童が「見えない」と訴えることに懐疑的で、明確な説明は今の所出ていない状況である。

行動面に関する項目（その 1）

・評価の（A,B,C,D）段階に沿って〇を付けてください。

A（ない、もしくはほとんどない）…0 点	B（ときどきある）…0 点
C（しばしばある）…1 点	D（非常にしばしばある）…1 点

・設問群ごとに合計得点を出す。→少なくとも 1 つの群で合計得点が 6 ポイント以上なら、「不注意」または「多動性－衝動性」の問題を著しく示す、と考えられる。

※「不注意」「多動性－衝動性」に関する各 9 項目、計 18 項目から構成される。

設問群		質　問　項　目	評価段階
不注意		1　学業において、綿密に注意することができない、又は不注意な間違いをする。	A B C D
		2　課題または遊び活動で、注意を集中し続けることが難しい。	
		3　直接話しかけられたときに、聞いていないように見える。	
		4　指示に従えず、課題や役目をやり遂げることができない。	
		5　課題や活動を順序立てることが難しい。	
		6　（学業や宿題のような）精神的努力の持続を要する課題を避ける。	
		7　課題や活動に必要なものをなくしてしまう。	
		8　気が散りやすい。	
		9　日々の活動で忘れっぽい。	
		「不注意」の合計（　　）ポイント	
多	多	1　手足をそわそわと動かし、または、椅子の上でもじもじする。	A B C D

動性－衝動性	動性	2　教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。 3　不適切な状況で、余計に走り回ったり、高いところへ上がったりする。 4　静かに遊んだり、余暇活動をしたりすることができない。 5　じっとしていない、または、まるでエンジンで動かされているように行動する。 6　しゃべり過ぎる。	ＡＢＣＤ
	衝動性	7　質問が終わる前に、出し抜けに答え始めてしまう。 8　順番を待つことが難しい。 9　他人を妨害したり、邪魔したりする。	ＡＢＣＤ
	「多動性－衝動性」の合計（　　）ポイント		
自由記述	※　上記の質問項目について具体的に記述したり（例：不注意 2 では…）、各設問群における気になることなどがあれば自由に記入してください。		

Table 1〈アセスメントシート②〉

Ⅲ　検査結果

今回実施した、WISC-Ⅳ知能検査の結果について、まず児童の概観を示す全検査からはじめ、合成得点プロフィール、評価点プロフィールと徐々に細かく分析を行った。

１．全検査 IQ について

検　査　結　果	記　述　分　類
全検査IQ（FSIQ）	平均 － 平均
言語理解指標（VCI）	平均 - 平均の上
知覚推理指標（PRI）	平均の下 - 平均
ワーキングメモリー指標（WMI）	平均の下- 平均
処理速度指標（PSI）	平均の上- 高い

Table 2　WISC-Ⅳ検査結果表

Table2WISC-Ⅳ検査結果表と、Fig. 1 合成得点プロフィールに示したように、全検査 IQ は「平均」であり、全般的な力は同年齢と同様であることを示している。

２．合成得点プロフィールについて

Fig. 1 合成得点プロフィールから、他の項目に比べて、「知覚推理」「ワーキングメモリー」がやや低く出ている。このことから、視覚による認知と作業記憶のやや苦手さが考えられる。

一方、処理速度がかなり高く出ている。このことから、視覚的な短期記憶の高さと視覚的な環境への過敏さが考えられる。

３．評価点プロフィールの結果

（１）言語理解（VCI）について

Table 2　WISC-Ⅳ検査結果表に示したように、言語理解全体では、「平均」で同年齢と同様の力を示している。しかし、Fig.2 言語理解（VCI）に示したように、言語理解の各項目ごとに比較すると、「類似」「理解」が平均域であり、言葉による抽象的思考や一般常識の力が同年齢程度であると考えられる。一方、「単語」はかなり高く、語彙力は同年齢と比べてかなり高く、言葉への過敏さが考えられる。

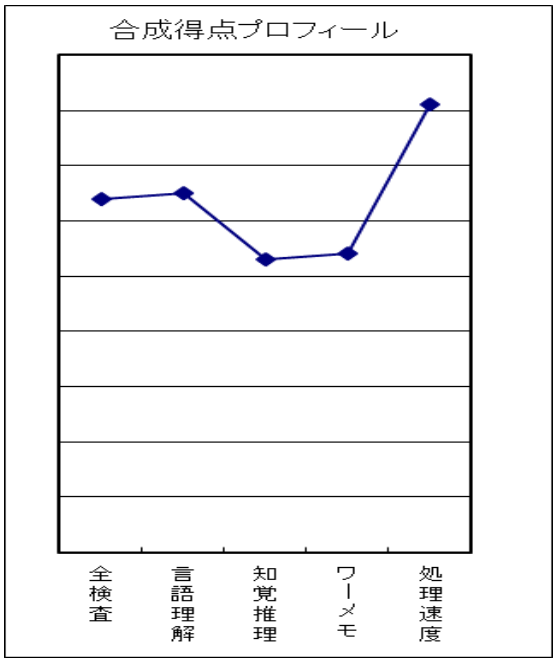

Fig. 1 合成得点プロフィール

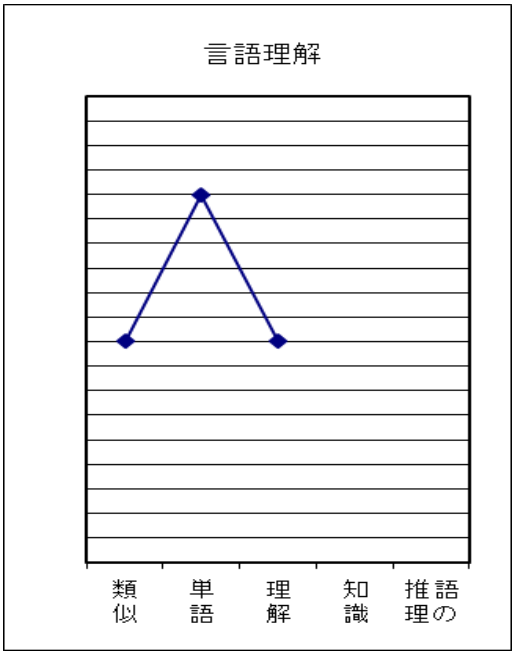

Fig.2　言語理解（VCI）

※　言語理解（VCI）の検査項目「知識」と「語の推理」は他の項目の検査が信頼性が高いということで日本版 WISC-Ⅳ実施・採点マニュアル（日本文化科学社）の規定により実施しなかった。

（２）知覚推理（PRI）について

Table2WISC-Ⅳ検査結果表から、知覚推理全体では「平均」域であり、同年齢と同様の力と考えられる。詳細に見ると、Fig.3知覚推理（PRI）示したように、各項目が平均域で且つバランスがとれている。このことから、視覚情報による法則性の理解や空間認知が同年齢と同様の力であると考えられる。

（３）ワーキングメモリー（WMI）について

Table2WISC-Ⅳ検査結果表から、ワーキングメモリー全体では「平均」の域ありで、同年齢と同様の力を示している。詳細に見ると、Fig.4ワーキングメモリー（WMI）から、「数唱」「算数」が平均域である一方、「語音整列」がかなり低く出ている。このことから、単純な聴覚的短期記憶は同年齢と同様の力であるが、複雑な聴覚的短期記憶や作業記憶する力は低いと考えられる。

（４）処理速度（PSI）について

Table2WISC-Ⅳ検査結果表から、Fig.5 処理速度（PSI）から、処理速度全体では、「高い」域である。このことから、視覚的短期記憶する力が高く、記号等の課題には集中して取り組む力が高いと考えられる。

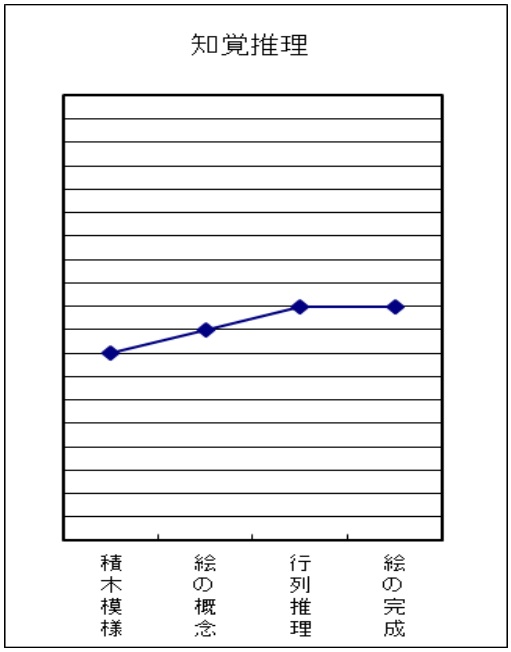

Fig.3知覚推理（PRI）

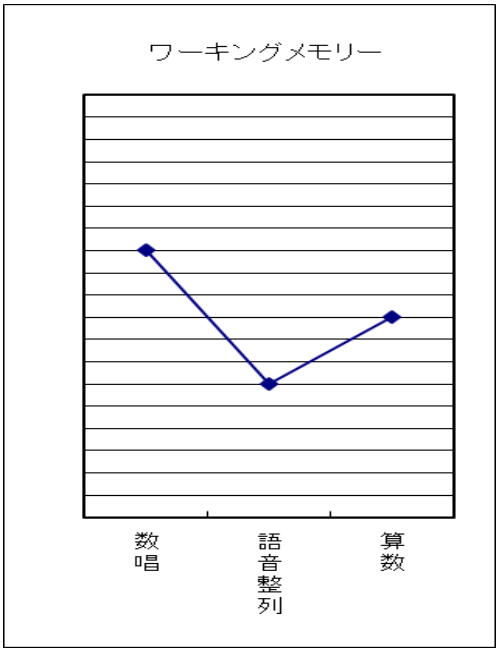

Fig.4ワーキングメモリー（WMI）

Ⅳ　考察

１．WISC-Ⅳ知能検査の結果からの実態分析

○　全体的な知的水準は WISC-Ⅳの指標で「平均」と、知的に「通常」域である。このことから、全般的な学習する力は平均的であり、学級担任の「学力面全体での問題はない」ということと同じ結果となった。

○　「単語」はかなり高く、言葉への過敏さが考えられる。これは、聴覚的な過敏さである。その結果、言葉に敏感に反応し、結果的に落ち着きがなくなっていると考えられる。一方、言葉に敏感であることから、語彙力を増やしたと考えられる。また、検査時低学年で、今後の変化が予想され、抽象的思考が同年齢程度で言語による思考力は同年齢と同様である。この２つを合わせて考えると、語彙力の高さがそのまま維持されることは考えにくく、成長とともに平均域へと近づく可能性がある。

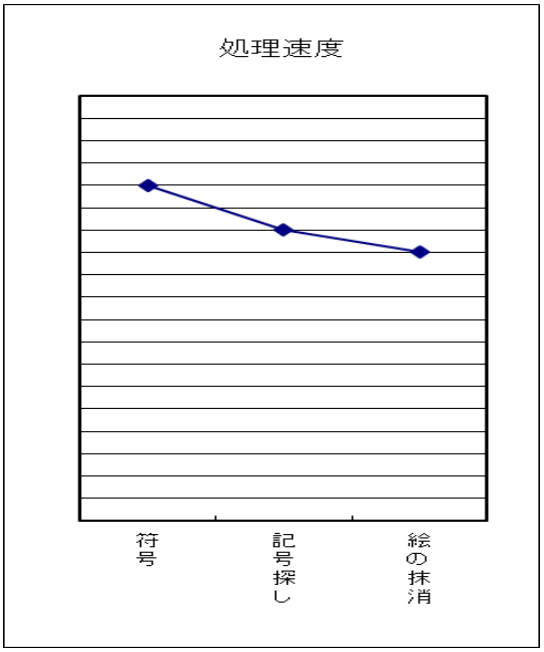

Fig.5 処理速度（PSI）

○　知覚推理の各項目の評価が、平均域でバランスも取れている。このことから、視覚情報に

よる法則性の理解や空間認知が同年齢と同様の力を示していると考えられる。そのため、今回の検査においては、空間認知を含めた視覚認知に、苦手さや特性は確認できない。しかし、学年が上がっても「見え」への困り感が継続する場合は、再検査を実施することも必要になることが考えられる。

○　数唱などの単純な聴覚的短期記憶は平均域である。一方、複雑な聴覚的短期記憶や作業記憶には、かなり苦手さが考えられる。このことから、長く、複雑な文章の理解の困難さがあり、そのことが、文章表現の苦手さに影響していることが考えられる。

○　視覚的短期記憶がかなり高く、視覚的な過敏さも考えられる。そのため、視覚情報に過敏に反応し、その結果、リセ祈祷の他動性や落ち着きのなさに現れていることが考えられる。しかし、簡単な作業にはかなり集中する力が高く、スピーディにこなせる力を持っている。

２．WISC-Ⅳ知能検査の分析のまとめ

これまでの細かな分析をまとめると、次の２点に整理できる。

（１）衝動性、多動性について

聴覚的、視覚的な刺激に過敏さがあり、様々な刺激に過敏に反応する傾向がある。そのため、多動性、衝動性につながり、学習に落ち着いて取り組めないと考えられる。

（２）「見えない」と訴えることについて

語彙力があり、短文での表現力は高い。一方、作業記憶の苦手さがあり、複雑な文章表現の苦手さがあり、思ったことを上手に表現できなことが考えられる。また、衝動性があり、よく考えずに衝動的に表現する傾向もある。そのため、的確に困り感を表現できず、「図が分からない」を「図が見えない」等のように、誤解を生む表現となった可能性が考えられる。検査結果報告時の協議で、その後の様子を確認すると、「見えない」といった訴えは少なくなっており、視覚的に問題はなかったと考える。

３．学校での具体的支援の提案

これまでの分析、特に（１）（２）を基に、学校現場で活用できる、具体的支援策について、整理する。

○　複雑な聴覚的短期記憶や作業記憶が低いことへの支援

・　説明や指示は、「簡潔に、短く」、「教科書を出します」といった三語文程度。
・「算数の教科書を出して…出しましたか？　教科書の 42 ページを開いて…開きましたか？問題５をしましょう！」といった、一つの指示で一つの行動の「一語一行動」で指示する。
・　「今から３つのことを言います」と予告する。
・　言いたいことが表現できない場合は、「こういうことね」と見本を示す。

○　環境への過敏さと、不注意傾向への支援

・　視覚的聴覚的な環境を整理する（不要な掲示物は教室後方へ移す等）。
・　見たものが気になり過敏に反応する傾向があり、正しい行動を注意で促す。
・　文脈より単語に過敏に反応しがちなので、落ち着いて最後まで聞くように促す。
・　流れに沿わない発言等には、叱責ではなく注意を促す。
・　宅習は、居間ではなく静かな環境を準備する。

以上のように、“日常の気づきから支援につながる「子どもと教師のためのアセスメントシー

ト」”で示された「多動性、衝動性」が、WISC-Ⅳの検査結果からも証明できた。また、WISC-Ⅳの検査結果から得られる様々な分析を、２つの視点にまとめることができた。その結果、主訴を含めた児童の困り感を、２つの核として整理することができた。そのため、学校での支援についても、２つのポイントに絞り、具体的で、学校で活用できるものを提案することができたと考える。

Ⅴ．今後の課題

この結果を基に、学級担任と特別支援教育コーディネーターに上記の具体的支援策を提案し、協議を行った。検査分析については二人の理解と納得を得た。具体的支援策については、今後取り入れていくということである。そのため、支援策を実行された後の児童の変化を確認し、支援策の検討を積み重ねていくことが必要である。年度末に、本児童の個別の指導計画による評価がまとめられ、報告されることになっている。その報告を基に、この研究の再評価が課題である。

Ⅵ．参考文献

上野一彦、梅津亜希子、服部美佳子編［2005］軽度発達障害の心理アセスメント　WISC-Ⅲの上手な利用と事例　日本文化科学社.

上野一彦、藤田和弘、前川久男、石隈利紀、大六一志、松田修［2010］日本版 WISC-Ⅳ実施・採点マニュアル　日本文化科学社.

上野一彦、藤田和弘、前川久男、石隈利紀、大六一志、松田修［2010］日本版 WISC-Ⅳ理論・解釈マニュアル　日本文化科学社.

榊原洋一・佐藤曉著［2014］発達障害のある子のサポートブック　学研

月森久江編集［2006］教室でできる特別支援教育のアイデア　中学校編　図書文化.

月森久江編集［2006］教室でできる特別支援教育のアイデア　中学校・高等学校編　図書文化.

月森久江編集［2008］教室でできる特別支援教育のアイデア　小学校編 Part2　図書文化

月森久江著［2018］発達障害のある子のケース別サポート実例事典　ナツメ社.

藤田和弘、上野一彦、前川久男、石隈利紀、大六一志編著［2005］WISC-Ⅲアセスメント事例集　―理論と実際―　日本文化科学社.